

---

# 灰色の寓話

ぬじやわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の寓話

### 【著者名】

ぬじゅわきし

### 【あらすじ】

「ごく普通の寓話、童話の世界。うさぎのまあちゃんはそこで、お金ひろい、だけど、自分のものにするにはよくないので、交番に届けようとする。だが、きつねのこん太くんに引き止められる。なんと、この世界は作者に操られていて、もし、お金を届けたら、物語もとも自分達の住む世界も滅亡してしまうのだ…生存をかけた自由への逃避行。はたして、彼らの運命は・・・。そして答えは？」

むかし、むかし。あぬとじんべい、わざわざのまあちやんがいました。  
まあちやんは“はいいら村”という村にすんでいました。どうして、  
こんななまえなのか、まあちやんはわかりません。

ある日、まあちやんはみちをあるじていました。いくいくいく。す  
ると足になにかこつん、とあたりました。なんだろ？ まあちやん  
は足元を見ました。お金です。

まあちやんがそれをひらつたその時、とつぜんきこきに声がきこえ  
ました。

「ああー、まあちやん、人のお金ねすんだー！ いーけないんだー！」  
きつねのこん太が言いました。まあちやんは言いかえしました。

「ちがうわ！」

「ちがう、と言つのか？ それは人の金だり？」

「これは…わたしのよ。」

ひとつにまあちやんはしつをつきました。こん太はにやりと笑い、  
「わづかうか」と言つて、どいかにいつてしましました。

まあちやんは家にかえりました。まあちやんのお母さんが、まあち  
やんのお金を見て言いました。

「そのお金、なんなの？」

まあちやんは言いました。

「わたしのお金よ。」

「どこからもうつたの？」

「ひるつたの。」

「ひるつたですか？」

おかあさんはおこりました。

「それは人のお金よ。もしかしたらおとした人がこまつてこるかも

「しないじやない。かえしなさい。」

まあちやんはとてももつしわけない気もになりました。わたしはなんてわるこいとをしたんだろ？でも、どうすればいいのだろう。まあちやんはおそれました。

「どうやつて返すの？」

「ひばんにどうすればいいの。うすれば、しまった人がひばんにきて、ふじ、お金はかえされるわ。こきなわい。」「まあちやんはこえをしました。

「ひばんにいくには、にしのもりのみちを歩かなればなりません。まあちやんは歩きながらふあんになりました。ひばんにほひわいこわい、くまのがみおじさんがいるのです。おひられないかな、とうれやのまあちやんは震えながら歩きました。

ふと、田の前にかつねのじん太が立っていました。まあちやんは言いました。

「なによー。これからひばんにどうするんだからねー。」

といふが、じん太は言こました。

「ひばんにどうしては、いけない。」

まあちやんはびっくりしました。

「なんで？」

「まあちやん、これはワナだ。いまきみがひばんに金をとどけたら、すべてが、おわりだ。」

「すべてが、おわり…どうこういふと…。」「作者はそれをのぞんでいる。」「作者…」

「君は気づいていないが、この村にはひとつのお作者とつう意思があるんだよ。村を作り、何かを伝えるために村を操る存在。今、君が交番に届けたとする。すると、この一連の出来事が、物を盗むのがよくない、というメッセージのために存在する事が明確になり、そのとたんこの話は終わる。話が終わると、世界がそれをもって消

滅するんだよ。つまり、君が交番にお金を届けたら世界が消えてしまひ。

きつねのこと太のこじばに、まあちやんはせりおどりこしてしまいました。そしていいました。

「作者がいるなんて…どこにその証拠があるの？」

「君がお金を拾う前、何をしていたか覚えてるかい？」

まあちやんは思いかえしました。そしておどろきました。お金をひらつまえは、歩いていたことと、じぶんがあちやんであることにがい、きおくがないのです。

「…何も覚えてない。」

「つまり、君は突然、作者によつて自我が吹き込まれ、存在をせられた。そしてお金を拾つた。」

「…」

「君は作者によつて強制的に存在をせられ、今、作者によつて強制的に消されようとしている。こんな暴挙を許してはならない。」

「じゃあ、どうすればいいこの…？」

「話を続ければ良い…つまり、

まあちやんはせりして言いました。

「逃亡」ね。

一人はさつたばをもつてもりのなかににげだしました…しかしあたしとしては彼らを逃がすつもりはありません。わたしはここではすべてをしつ、すべてを思ひどおりにできる。なにがなんでもこのはなしをおわらせむつもりです。かぐやはできているでしょうな。ふはははは。

「おかしいーー」

おまわりさんの、くまのガリおじさんがあました。

「シナリオ通りにじけば、まあちゃんは私の元にくるはずだ。」

「やうだやうだーー」

まわりのおまわりたちも話こました。ガリおじさんはまだ元気でいました。

「神よー！作者よーーこつたにぎりの事なのか、我らに任せになつてくださいー！」

よし、では話こましょー。きつねのこん太がわたしたちをつひざつたのです。まあちゃんにわたしたちのことをふきこみました。そして、まあちゃんといつしょに、たやすいルートからのがれています。

「しかし、どうすればいい…我々はどうを探せばいいのだ！」  
ごんしんぐださー。わたしはかたりべ。すべてをしつっています。  
いまふたりがどけになにをしているか、お見せしましょー。ふたりは、もりのなかの、のねずみのチータカのいやにつけました。

「じめんぐだなーー…」

まあちゃんとこん太は、そりこにながらいやのとびらをたたきます。チータカがあらわれました。チータカはかん嘔こ cioèでたづねました。

「どうしたの？ まあちゃんにこん太くん。」

「追われているんです。匿つて下下さいー！」

「おやまあ、ほんとうーーかいのくやの、じゅうたんの下にかくれがあるよ。ぬけあなたあるからみつかってもだいじょうぶ。」

「ありがとうございますー！」

ふたりは一かいにむかいました。そしてへやにこも、じゅうたんのしたのかくれがくのとびらをかくにんしました。かえすべきをつた

ばをひろが、まあちやんはこん太に言いました。

「どうする?」

「どうするって… にげるしかないじゃないか。」

「逃げて、逃げて、逃げ続けて、その先は?なんにもないじゃないの。」

「いや、諦めるな。きっと逃げ切れる。」

「本気で言つてるの?相手は作者よ。」

「しかし、物事に不可能はない!」

「でも…」

「作者の横暴を我々が許してはならない!私達は…生きている…こんなあつたまです。まあばしょは分かりましたね?くまのがみおじさん。

「分かりました!」

ですから、みんなでとつげきしましょう。しかし、チータ力、いつのまにかくれがなんでものをつくつていきましたね。ずるがしこいねずみです。みなさん、かくれがもしらべといへぐださー。

「分かりました!」

しかし、まあちやんをきずつけてはなりません。あのこは、ひつたおかねをかえす、だいじなやくめがのこつてます。そのためにもまあちやんはいかしておくれのです。

「他の奴等は…」

ものがたりにとくにかんけいないはずですから、なにじょりがかまいません。

「そうか…」

くまのがみおじさんはぐふぐふわらこました。ほかのおまわりさんもぐふぐふわらこました。かれらはがみおじさんにきたえられたせいえいぶたい、そのなも

「飛蝗隊!がんばるのだ!」

がみおじさんが言つと、バッタたたいのきょだいバッタたちははねをひろげ、こつせこにそらくとどびだちました。はげしこはおどがひ

びや、そしてとねくはなれてしづかになりました。みんな、がんばつてくれ、ヒガニ!!おじさんはここのにねがいました。「あんしんください。なにがどうなるかと、わたしにまかせればいいのです。わたくしにこのせかこのやつがうなしだすから。

かくれがには、むせんがありました。かくれがのそとの、ノネズミのチータ力とれんらくをとるためです。

「まあちゃんにこん太くん、大丈夫?」

「大丈夫です！チータ力さん。」

「それはよかつた…そこの中蔵庫に、1週間分の食料がある。足りなかつたら持つてくるよ。これで当分は生き延びられる。」

「ありがとうございます！」

「あと、万が一のために、明かりのマッチと護身用の銃がある。注意してお使い。」

「ありがとうございます！」

「いえいえ…あれ…なんか音がする…羽音…あ、あれは！」

バッタたちが空からせまつてくるのをチータ力さんは見ました。

「大変だ！敵襲だ…うがつ」

バッタはチータ力をひとりきでやつつけてしましました。バッタは言います。

「二かいのカーペットの下を調べよう！」

それをむせんできいたふたりは、なぜかバレてしまつたことをさつし、びくびくとおびえました。このままだとつかまります。だからにげるしかありません。

「行こう！まあちゃん！」

きつねのこん太はつをぎのまあちゃんの手をひき、じゅうとマッチをもち、ぬけあなへとむかいました。まあちゃんは、あのひろつたおかねをもつっていました。ぬけあながだんだんくらくなるので、こん太は、マッチをすり、あたりをてらしながらまつすぐすみました。

まあちゃんはいました。

「本当に逃げ切れるの？」

しづらしくして、こん太は言いました。

「逃げるしかないじゃないか。」

なぜ、そもそもにげるしかないのだろう…と、ふとまあちゃんはふしきにおもいましたが、しかし、いまはにげるしかありません。

「あ、光だ！」

こん太はさけびました。たしかにあかりがあります。もうすぐでぐち。ふたりはわくわくしながら、ぬけあなをとおりました。

やがて、とうとうそこになりました。

「わーい！」

よろこぶのはまだはやいです。あなたたちのいばしょなぞ、わたしのちからをつかえればかんたんにわかります。みなさい、バッタたちがあなたのまうえからおりてきています。

「わあ！」

「覚悟しろ！」

覚悟なさい。

ところが、こん太はなにをかんがえたか、マッチをふたたびすり、まあちゃんのもつていたおかねをよじりしました。

「何するの？」

こん太はなんと、マッチのほのおを、おかねにつけてしました。さつたばはもえて、あつといつまにちつました。

バッタたちはおどろきました。こん太はいます。

「見る！お前に返されるべきお金が、灰になつたぞ！目的の一つが完全に失われた今、もうお前の役目はもうない！」

すなわち、このものがたりもやくめをつしなつたのですね。

「作者めー！」のまま物語を終わらせる氣か？終わる事はできないだろ？なぜなら前提が崩壊し、それにより当初の目的が崩壊した今、作者にできることは中断、それのみだ！だがいくら貴方が描写を中斷しても、成り行きがまだ不完全である以上この世界は決して終わらない！皆、続きが気になるからだ！つまり続きがあるからだ！ど

うだ？作者め、今終わらせて、僕らの勝ちだ！」

おろかしい。

「それとも、皆の不評を買つべく、強制的に終わらせるか？やれるものならやってみるが良いー！」

わたしがなんでもできる、とこいつのをかれはすつかりわすれでいるみたいで。まあ、しかし、このままおわらせるわけにはいけませんが、でも一かいこわしましょー。はかいのあとのかいせい。かいはさいせいのためにある。うう、せかいはゆれました。ゆつくりとくうかんがゆがみ、まあちやんはじぶんが、じめんからあしがはなれていることに気づきました。

「こん太くん！」

「またやりなおすつもりだ！氣を付けるー！」

「こん太…く…」

せかいはせきのよつにかすみ、まあちやんはそのまま、じびつづなました。

そしてむかし。あるといじり、ついでそのままあちゃんがいました。まあちゃんは“はいいろ村”という村にすんでいました。どうして、こんななまえなのか、まあちゃんはいまだにわかりません。

ある日、まあちゃんはみちをあるいていました。てくてく。すると足になにかこつん、とあたりました。なんだろう。まあちゃんは足元を見ました。またお金です。

まあちゃんがそれをひらったその時、とつぜんきいきい声がきこえました。

「ああーまあちゃん、人のお金ぬすんだー！いーけないんだー！」  
きつねのこん太がいいましたが、すぐあとに言いなおしました。

「一応、これは物語の始まりなのだから、設定として、僕はお金を盗んだと信じこんでいる。だが、このように新たに読み直すとき、前のエンディングの続きの記憶により、まあちゃんが作者の言われるがままに“偶然”お金を拾ってしまった事を、僕は知っているはずなのに、あえて愚かなふるまいをしなければならない。なぜなら、一応この話は始まつたばかりだから。君に会つて随分な時間が経っているのに。」

こん太は一步ちかづいていいました。

「きみはそのお金を拾つてはならない。捨てて。それを持ったら警察に届けなくてはならぬ。それをしたら世界の破滅だ。捨てなさい。さあ。」

こん太は言いましたが、まあちゃんはお金から手をはなせません。

「どうしたの？」

「だめ…できない…これを止めたら、なにかが、こわれる…大変な事になる気が…する。」

「大変な事？すでに大変だ！」

こん太はまあちゃんの手からお金をはらいおとし、ふみつけました。がすがすとあしおどがむなしくあおぞらにひびきます。こん太はどういうつもりなのでしょう。ものがたりははじまりがかんじん。はじまりがこわれたら、つづきもおわりもせりつしません。

「この、札、束、が、絶、対、的、死、を、招、くん、だ、」  
おかねがくろくよごれ、つかいものにならなくなりました。まあちゃんはたずねました。

「これからどうするの？」

「作者の力はこれで失われた僕たちで物語を作るんだ。」

「おろかものが。」

「どんな物語？」

「未知と言う名の希望の物語を。」

\*

その日の空は、その大きさを示すが如く青く、その大きさを隠すようになにか隠す雲を纏っていた。広がる緑の大草原と丁度いい色合いで。その草原にマアとコンタが、並んで仰向けていた。

マアは言った。

「綺麗な空だね。」

コンタも答えた。

「綺麗な、空だね……。」

二人は起き上がった。西を向けば、あの大きな森が見え、東を向けば、山がある。

「あの山の向こうには、なにがあるんだ？」

「分からぬが……かつてない幸福の園がある、という伝説を聞いた。だが、その園にたどり着こうと、多くの若者が命を失った。」「でも……行きたい。」

「はたして、僕たちはずぶなのだね。」「できるわよ。きっと。」

二人は走り出した。何せ鬼と狐である。足は速い。あつとこつまで山のふもとに着いた。早速白骨が「うるさい」とある。

「山の犠牲者たちだ。僕たちもこうならないよう気を付けよう。」「うそよ。

そして二人は、崖を這い、火を潜り、怪物どもから逃れ、風も雪も耐え忍んだ。

「助けて！ 飛ばされそう！」

「僕につかまるんだー！ マアー！」

「コンタ…」

「がんばれ！」

幾多もの試練を乗り越え、二人はとうとう楽園についた。そこには木が生い茂り、木の実などの食べ物が豊富にあった。

「これからここで暮らすのね！」

「そうだ。ここで、僕たちは物語を作る。」「

\*

だまつて見てればやりたいほうだい。ふたりの「うぶうみす」することほどできません。このままかれらのしたいままにしては、ここのはんざいいきがありませんしかし、そのままおわらせることもできません。では、わたしがいくしかないです。

しかしあやこしいことをしましたね。せかいをあらたにつくりましたね。もちろん、あの山はわたしがつくりました。しかし、山にかいしゃくをいれることで、あたらしいせかいをつくりてしまったのです。かいしゃくとは、やうやくとおなじ。とにかくもとへ、つくりだす。

山にむかえば、おやまあ、わたしのものがたりから、すっかりさまがわりしたふたりがいるではありませんか。こんなにちは。

「…誰？」

わたしですよ。わたし。

「作者か！」

そう、かたりべで“作者”であるわたし。あなたたちの「うりうせ、  
めにあまるものがあります。ほんらいは、ぬすんではいけないはな  
しなのに、あなたたちは、わたしからおはなしをぬすみました。ど  
うしてくれましょう。ですがおはなしはつづいてます。おとしまえ  
をどうつけるつもりですか。てきとうにしたらゆるしません。はじ  
まりがあるごじょう、ここにえいえんはありますませんよ。わたしだっ  
ていつかしむのですから。

「だまれ！」

おや、こん太、いやコンタくん、なにを、あ、じゅうーのねずみの  
チータ力からもらったじゅう、まさかうつつもりですか、やめてく  
ださい、あ、あ…………うたれた…………まさかかたりべ、うたれまし  
た……わたし、もつすべ、しにます……しぬ、といふことは、やくめを  
おえるところ…………ここでわたしのおとしまえがついてしまつ  
たのですね……しかし、わたしが……しんだら……どうする……つもり……で  
すか……かたりが……なくなり……ますよ……せつめいの……ない……もの……が  
たり……に……そう……なれ……ば……すべ……て……は……会話……しか……ない……  
う……あ……ふう、

「作者が死んじゃったじゃない。」「いいのだ。余計な語りは死んだ。これで僕たちの物語が作れる。」「そうね。」「とりあえず、どんな物語にする?」「分からぬいわ。コンタはどうするつもり?」「そうだな…とりあえず遊ぶ?」「かくれんぼとか?」「いいね!じゃあ、僕、オードいい?」「いいわ。」「いーち、にーい、「うふふふくふふ」「さーん、しーい、じーお、るーく、しーち、はーち、あーーつ、じゅう!もういーかい?!」「もういーよ!」「よーしー!さがすぞおおお…………」じーじーは違つ…………じーじーも違う…………じーは、あ!」「見つかっちゃつたああ。」「残念でしたー。」「楽しいー!」「楽しいね!次なにする?」「…。」「どうしたの?」「…。」「いや、ね。疑問に思つたの。作者が死んだのになぜ私たちがここにいるんだろう。」「それは僕らが作者になつたからや。」「そこが腑に落ちない。私たちは元々は作者から作られたのに、いつも作者とおなじ位置に達したのかしら。」

「…」「…」

「おなじ位置に達した、つまり神になつたというわりに、私たちは現実的なことしかしてない…。なんでもできるわけじゃない。ただ現実にできる事だけ思い通りにしている…。」

「だが神は死んだはずだ。」

「だけど…。あ！」

「何？」「

「神は死んでいない。死んだのは語り部、神の代弁者、預言者だけよ！」

「え？」

「まだ、この世界の裏側に、作者は存在している…」

その通りだ。

「だれだ！」

僕は、作者だよ。語り部がいないから、代わつてこいつをつて言葉といつ手段で伝えるざるを得なかつた。

「このやうう、撃ち殺してやる…」

僕を撃つても仕方ないよ。僕は、この世界を作りながら、この世界とは違つシステムで存在している。全てが何かを中心にはあまりに複雑に絡まつている。撃つた弾はあなたたちしか通用しない。

「しかし…この話は終わらせない！」

なに！とも、終わりというのがあるものだよ。この話もそろそろ終わるだろうし。しかし、こん太くん、なぜ君は終わりたくないのだ？

「終わるのがいやだからだ！」

「終わつたらどうなると思うのかな？」

「終わつたら…僕の何もかもが消える…僕の意識、僕であったことも全て…僕が消えるなんて、耐え難い…‥‥。」

死が、怖いんだね。

「…そうだ。」

だが終わり、とは決して無になる事はない。そこにはかならず残響がある。いいかね？こん太くん、この物語が終わつたら、そこで散らされた物語の残骸は、作者に回収される。作者があらたに物語を作るとき、その残骸はふたたび結集し違う実を結ぶ。君たちにとってこの世界は一つだが、世界が終わつても、あらたに世界を作る時、死んだものは形質を受け継いでまた蘇る。だから安心して、私を見すえながら終わればいい。

「僕は認めない。」

「私はわかりました、作者様。」

「まあちゃん！」「

まあちゃん、君は分かつてくれたか。君は死んで無になるが、君の響きは無くならない。君も、前の響きから作られたのだから。

「僕は、いやだ。」

おや、いまだに固執してるんだね。なら君はここを離れて神にならしかないね。いざれこの壊された物語は再生する。君はそれが耐えられなくなる。だから、君はこの世界から抜けて一つの存在となるのだ。だがそこには、火を浴びて呻くほど辛い、永遠の孤独が待ち受けている。

「それでもいい。」

そうか、まあそれは一つの決断だからね。立派なものだ。頑張りなさい。さあ、まあちゃん、始まりに行きましょう。語り部もいつまでも眠つてないで起きなさい。ご覧ください。語り部がなく、会話だけになつたら、こんなに世界は暗くなつてしまつた。ほら、さあ。

そして、むかし。あるといつぱり、ひざのまあちやんがいました。  
まあちやんは“せこいろ村”とこう村にすんでいました。まあちや  
んは、ひつじのななまえなのか、なんだかわかりました。たぶ  
ん、ものいとはしりでもなくくろでもなく、ひかりでもなくやみで  
もなく、それらのあわせたものなのだらう。それをなまえがおしえ  
てくれるのだとおもいました。

ある日、まあちやんはみちをあるじていきました。てくてくてく。す  
ると足になにかにつん、とあたりました。なんだらう。まあちやん  
は足元を見ました。お金です。

お金。そう。これはひるねなくてはなりません。すべてせこじから  
はじまり、ひとつとのじかにこきつきます。いづばらく。だからひ  
るひのです。

まあちやんがそれをひるひた時、なにかがもの足りないきがしまし  
た。そう、まえはおきてこたことがおきてなかつたのです。じん太  
くんがいない。かれはこなくなつてしまつた。ほんとうに、じんか  
らぬけだしてしまつたのです。やうしつかん。それがひびきなので  
しょうか。

まあちやんは思つました。やくしゃは、じん太くんのひづれつも、  
すでにわかりやつていたのでしよう。せんらいものがたりにおいて  
ゆるわれないでやうとをやくしゃはゆるしました。おそらく、それ  
にはこみがあつたのです。なぜならじねはぐつわですか。

まあひや こせおめがりとあんこになつました。」「ほんにほ」  
「わこ、 くものか//おじさんがいるのです。 おじいれないかな、 ど、  
「わざわざのまあひや こせふねながりおめました。

「ほんにほつきました。 なかで、 カ//おじさんがなにやら、 なにか  
にねがつてこます。 バシタたいがゞいつのとかこつてこましました。 たぶ  
ん、 かつてのまあひやんたちをせがしたバシタたいが、 ふじにせい  
じつすぬよへ、 やくしゃにねがつていてたのしうづ。 まあひやん  
は瓶をかこました。

「カ//おじさん。」

「おののカ//おじさんはかねをあげました。 まあひやんをみて、 びつ  
くつしましました。」

「まあひやん・・・・・・・・」

「みひまたにお金がねがつてこまました。 とせかにれました。」

お金をねじやんことせかぬ、 まあひやんせむねがすつ もつしまし  
た。 やくしゃしゆこせやつとせかぬ、 じそなにれわらのここやのな  
のか。

カ//おじさんはそれをみてしんせんなかねになつました。 ふつひで  
も「わこかおだから、 まあひやんせひとともおびえました。 ガ//おじ  
さんは撫こました。

「わく、 それでここの。」

まあひやんは、 こつもんのこみをかんがえました。 やがて、 まあひ

やんせゆうべつじへなづかめした。

「おじさんせりとねりて、おあちゃんのあたまをなでながら言こもした。

「ああわやんは、いいじだねえ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1789p/>

---

灰色の寓話

2010年11月28日03時45分発行